

高麗と前期倭寇

高 寛敏

はじめに

一、13世紀高麗の政治情勢

二、15世紀の日本の政治情勢

三、鏡神社所蔵の高麗楊柳観音像図

おわりに

キーワード：南北朝内乱、少弐氏・菊池氏・
大内氏、高麗忠烈王・忠宣王、
鏡神社高麗楊柳観音像

はじめに

歴史上、「倭寇」といえば、14世紀に高麗に（前期）、15世紀に明に（後期）に、大規模的長期的に侵入した日本の海賊集団を指す。ここでは前期倭寇に限って考えるが、その実体は史料的に不明確であるという難問がある。高麗では「三島の倭寇」と言っていたので、倭寇は対馬・壱岐・松浦の海賊であると認識していたことが分かる。しかしその侵入の様相からすると、背後に有力な九州や中国地方あたりの政治集団が存在していたことも否定できない。なぜこの時期に発生したのかという点については、日本の「南北朝の内乱」との関連があったのは明確であるが、別に倭寇の侵入を許した高麗の政治的事情を分析する必要がある。本稿では、13世紀の高麗の政治情勢、および15世紀の高麗と日本の政治的状况を、既往の研究成果を参考にしながら改めて考察し、不十分ではあるが、倭寇の問題について改めて考えてみたい。

一、13世紀高麗の政治情勢

1231年から1259年の高麗・蒙古戦争によって、

高麗の国土は荒廃した。さらに元宗・忠烈王代に当たる74年と81年の元の日本遠征に際しては、1200艘と600艘の軍船を建造させられたが、それらは暴風などのため全滅し、高麗海軍は裸同然になった。

98年、忠宣王が即位して忠烈王は上王となった。忠宣王の正妃は元の蘇国大長公主であったが、公主は王の寵妃であった趙妃を妬んで元に通報したため、趙妃一族は元に連行され、忠宣王も即位7カ月で廃位されて、忠烈王が復位した。10年間の元生活の間、忠宣王は武宗の即位に際して功を挙げ、瀋陽王に封ぜられ、1308年には高麗王に復位した。復位した王は元にあつて政治改革を志したが、讒訴にあつてまた廃位された。13年に子の忠肅王が即位し、瀋陽王の位置は甥の延安君が継承した。この時から高麗末まで、同じく元皇帝の駙馬である高麗王と瀋陽王が併存して対立する、という複雑な状況が生じた。特に延安君は忠肅王が酒色に溺れていると讒訴し、そのため忠肅王は元に5年間滞留することとなった。帰国した忠肅王は30年に子の忠恵王に譲位して元に戻った。まだ幼かった忠恵王ではあったが素行が悪く、32年に廃位され忠肅王が復位した。翌年忠肅王が死去すると、39年に忠恵王がまた復位したが、父王の妃嬪を強姦するなどの悪行を働いた末、44年に死去し、子の忠穆王が8歳の幼い身で即位した。

忠穆王が後嗣を残さずに死去すると、7歳にすぎなかった忠穆王異母弟の忠定王が即位した

が、外戚の専横が横行したため人心を失い、51年に江華島に追放され、翌年毒殺された。その跡を継いだのが忠肅王の子の恭愍王である。時まさに倭寇跋扈の時代であった。それまで高麗王は長期間の元滞在を余儀なくされ、元皇帝によって廃位と復位を繰り返した。また幼年の王が親元勢力の意のままに動いていたりした。

52年に恭愍王が即位した当時、元では紅巾農民暴動軍が起り、元王朝を揺り動かしていた。王の前には至急に解決すべき問題が山積していた。

王は即位直後に詔書を発して親政体系を確立するための措置を取り、成士達などの腐敗高級官僚を肅清し、これに反抗して政変を起こした趙日新一派を大量に追放した。56年には親元勢力の巨頭、奇轍・権謙・盧頭を一気に処断すると共に、柳仁雨軍を東北方面に派遣して、元が鉄嶺以北に設置した双城摠管府を落とし、印璫・崔瑩軍は鴨緑江を越えて元の軍事基地を陥落させた。奇轍の妹は元の順宗皇帝の第二皇后となって、皇太子を生んだことから、奇轍は皇帝一族として待遇され、その権威は高麗王を凌ぐほどであった。権謙・盧頭も元皇帝や皇太子にその娘を入れており、三者は結託して権力を振るい、元側でも高麗の女性との結婚を望む者が少なくなかった。恭愍王のこれらの処置により、高麗は従来の元に対する従属的立場を清算したのである。王の正妃魯国公主は、このような王の立場を積極的に支持したので、王は思い切った行動を取ることが出来たと言えよう。

倭寇問題は、即位時から対策の重要性が認識され、李穡は陸守・海戦・武挙科について上奏した。その後、恭愍王は諸所に軍を派遣し、倭寇討伐を図ったが、翌年から始まった対紅巾賊戦によって、それは棚上げとなった。

紅巾農民暴動軍は元の支配に大打撃を与えたが、敗戦して流浪し、高麗に大量侵入してきたのである。59年には4万の軍が、61年には20万

の軍が侵入し、後事の場合、首都が陥落するという大事に至った。しかし高麗は惣兵官鄭世雲の下に安祐・李芳実・金得培・安遇慶・崔瑩らの率いる20万の大軍を組織し、10万の賊兵を殲滅して首都を奪回した。上記の武将は当時の高麗軍の中核であったが、62年に金鏞の陰謀を契機に前3人は誅殺された。恭愍王即位以来、倭寇の侵入は熾烈を極めたのに、国軍は打撃を受けたのである。しかもその後の数年間、瀋陽の元残存勢力と高麗反逆者の侵入にも対処せねばならなかった。

恭愍王は国内改革を強力に推進するため、僧の遍照を還俗させて辛旽と名乗らせ、65年には三権を与えた。辛旽はまず田民弁正都監を設置して土地と奴婢調査を行い、権門世家の不法な篡奪を徹底的に取り締まった。また科挙を復活して新進士大夫を養成する一方、首都近傍と重要港口に万戸府を設置し、地方軍に身分を問わず人々を動員して倭寇に備えた。68年に明が成立し、元は蒙古高原に追われて北元と称するようになると、三度に渡って鴨緑江を越えて遠征を敢行し、反高麗勢力を一掃した。

辛旽の改革は余りにも急進的な面があった。やがて反対勢力の激しい誹謗を受け、69年から恭愍王との間にも軋轢が生じ、ついに71年に処断された。70年代に倭寇の動きが激しくなるのは、このような事と無関係ではなかろう。

これより先の65年、魯国公主が難産の末に逝去した。恭愍王は悲嘆に暮れ、自分の寿陵に付けて公主陵を営造した。その双陵は文官と武官像が並ぶ高大な階段の上にあった。双陵とその前の願利の工事のため、人民の困苦は非常なものであった。辛旽を処断した恭愍王は精神的にさらに異常になり、多くの後宮の女性たちには見向きもせず、美青年を集めて72年に子弟衛を設置して男色にふけり、甚だしくは、子弟衛の青年に自分の妃嬪を犯させては殺害した。結局、王は74年に子弟衛の人物に暗殺されて終わった。

74年に10歳で即位した禍王の出生には疑問があった。禍王は辛吨の子であると言って、朝鮮時代に編纂された『高麗史』には辛禍と呼んで反逆者扱いをし、諡号も記録しなかったが、恭愍王が処断した辛吨の子が後嗣になるはずはない。恭愍王は女性を近づけなかったのが、禍王はある王族出身であるとみるのが順当であろう。

禍王代になると李仁任が摂政となり、廉興邦・林堅味など世臣大族を腹心にして専横を恣にした。土地や奴婢の略奪、政敵に対する弾圧など、目に余るものがあつたが、崔瑩・李成桂によって88年に追放され、その後は禍王が親政したが、他人の女性を略奪するなどして多くの妃嬪を置いたり、酒食雑伎に溺れたとされたが、崔瑩に要請してその娘を迎えたので、崔瑩を後見人とすることが出来た。この間は恭愍王代よりも倭寇の猖獗が甚だしく、毎年10回以上に達し、首都近郊の昇天府にまで及んだので、遷都論が云々されるようにもなった。しかし高麗の倭寇討伐もこの頃から本格化し、連年のように勝報が伝えられた。74年の鴻山戦闘で崔瑩は倭寇を震え上がらせ、78年には昇天府まで侵入した倭寇を崔瑩・李成桂・楊伯淵らが殲滅したことは有名である。80年には崔瑩が海道都統使に任命された。

決定的なのは、崔茂宣が火炮を放つ能力をもつ火薬を発明し、77年に茂宣を責任者とする火桶都監が設置されたことである。火炮と軍船の大量生産と火炮を軍船に備える技術の開発は、世界海戦上でも画期的なことで、これにより倭寇を上陸させず、海上で討伐することが可能になったのである。それは80年に鎮浦に停泊した500隻の倭寇軍船を一挙に破壊し、陸に逃げた倭人を雲峰で全滅させたことで、その威力を十分に発揮した。83年には鄭地率いる海軍が朴頭洋で倭寇軍船を多数破壊し、89年には朴蔵指揮下に対馬を攻撃して倭船300艘を破壊した。その後の高麗・明関係の緊張や政治的変動の間合

を縫って、倭寇の侵入は続いたが、大勢はこれで決したのである。

88年、明はかつての元の双城摠管府支配を口実に、鉄嶺以北に明の鉄嶺衛を設置すると、一方的に通告してきた。これは宣戦布告に等しく、憤慨した禍王は崔瑩を八道都統使に任命して共に平壤まで進み、李成桂らの率いる遼東遠征軍を4月に出発させた。この遠征に反対の立場を取っていた李成桂は、遠征の不可能な事を説いて、6月に鴨緑江中の威化島から回軍し、崔瑩を捕殺して、禍王を退位させ、禍王の子昌を即位させた。回軍した以上、新王朝の樹立は不可避であったが、李成桂は89年に禍王・昌王を殺し、一時王氏遠縁の恭讓王をたてた末、92年に朝鮮王朝を建国した。足利義満が全国を支配し、朝鮮王朝が樹立したので、倭寇の侵入も終幕を迎えた。

高麗滅亡の主要な原因の一つは、恭愍王代の後半から禍王代まで王自身が腐敗し、88年に新進官僚の趙浚が上訴したような、甚だしい権門世家の土地兼併や搾取を止める事が出来なかったからである。高麗には自浄能力がなく、失望した趙浚・鄭道伝などの改革派は結果、李成桂が新王朝を樹立する事を望むようになったことである。次に、明の不法な要求に対して遼東遠征を企てた事である。回軍した李成桂は事大主義者として非難されているが、遼東遠征は当時の高麗の国力では冒険であった。この問題は外交上で解決するか、戦うなら防御戦を取るべきであった。この誤りが高麗滅亡の直接の原因になったのである。

二、15世紀の日本の政治情勢

倭寇の時代は忠定王2年(1350)2月から始まる。いわゆる「庚寅年の倭寇」である。『高麗史』はこの時、倭は固城・竹林・巨濟・合浦を寇したので、高麗はこれを討って300余級を斬獲したという。そして「倭寇之侵始此」と特筆

するが、その規模といい、引き続いて4月、5月、6月、11月に順天府をはじめとして南海沿岸一帯に侵入したことといい、「倭寇」の時代が到来したことを示している。以後、倭寇は毎年のように高麗を襲ったが、その範囲も東海・南海・西海一帯に及び、時には内陸部深く侵入したこともあった。1363年には首都の開城に戒厳令が宣布されもした。14世紀末まで続いた倭寇の大発生は、当時の高麗と日本の情勢に関係するが、九州に注目しながら日本の状況を概括してみる。これについては天本孝志『九州南北朝戦乱』（1982年、葦書房）に詳しいが、以下、その他の研究をも参考にして、筆者なりに整理したい。

後醍醐天皇の倒幕計画が発端である。六波羅探題がこれを察知したので、天皇は京都を脱出したが、捕えられて隠岐に流されたのが元弘1年（1331）である。翌年末から護良親王・楠木正成らによる倒幕運動が活発化すると、天皇は伯耆に脱出し、名和長年に奉じられた。このような中、各地で倒幕勢力が蜂起し、33年5月倒幕に転じた足利尊氏が京都の六波羅を壊滅させ、その直後に新田義貞が鎌倉を攻略し、鎌倉幕府は滅亡した。これを受け、同月天皇は帰京して復位した。歴史的な「元弘の乱」である。九州でも早くも3月に肥後の菊池党が博多の鎮西探題北条英時を攻撃して、これに呼応した。少弐貞経・大友貞宗の裏切りということもあったが、やがて両者が協力し、島津貞久も加わって5月に英時を討つのに成功した。

後醍醐天皇の「建武の新政」は古代の天皇政治の復活を目指す保守的なものであった。ゆえに武家の不満が高まり、鎌倉に戻っていた足利尊氏は36年、新政に公然と反旗を翻して、実弟の直義とともに京都に攻め入った。しかし新田義貞などの後醍醐軍と奥州から下った北畠顕家らの奮戦で、尊氏軍は敗戦し、尊氏兄弟は兵庫から海路遠く、尊氏を支持する武士の多い九

州に敗走したが、この時、周防の大内長弘と長門の厚東武実が兵船500艘を率いて援軍となり、また九州に迎えて助力したのが太宰府を支配していた少弐頼尚や筑前の宗像氏であった。尊氏は時を移さず、手勢一千騎を率いて博多の東、多々良の浜で3万の菊池武敏・阿蘇大宮司惟直の軍を破り、太宰府に入った。たちまち九州一円が尊氏方となり、4月3日、少弐頼尚・大友氏泰・宗経茂をも従え、兵力総勢50余万騎、兵船7千余艘をおし並べて、尊氏は海路を、直義は陸路をとって東上し、湊川の戦いで新田・楠木軍を撃破して入洛した。そして後醍醐天皇を吉野に追い払って光明天皇をたてる一方、『建武式目』を制定、自らは「征夷大將軍」となり、室町幕府を開設した。光明天皇の北朝、後醍醐天皇の南朝、すなわち「南北朝時代」「南北朝の内乱」の始まりである。後醍醐天皇は諸皇子を各地に派遣して、自勢力の糾合を企てたが、この時、九州に派遣されたのが、まだ幼い懐良親王であった。

その後の展開は意外なものであった。尊氏・執事高師直と弟の直義との間ののびきならぬ対立で、50~52年に起こった「観応の擾乱」である。政争に敗れた直義は南朝に降伏し、尊氏の庶子であったが、直義が養子として迎えた直冬を長門から九州に派遣した。「擾乱」は武力衝突に発展し、その結果、直義が師直を滅ぼし、尊氏が鎌倉に落ちのびた直義を殺すことで決着した。その間、九州では南北間の争いが新局面を迎えた。

ここで九州の諸勢力について簡単にみておこう。

尊氏は東上に際して博多に九州探題を置き、一色範氏を配して幕府の拠点とした。

九州在地の代表的な勢力は、源頼朝が配置した九州の守護三人衆、つまり少弐・大友・島津の三氏である。少弐氏の祖は武藤資頼であるが、大宰少弐に任ぜられ、大宰府の最高責任者

となって少貳氏を称し、また筑前・豊前・肥前・対馬守護ともなった。対馬の宗氏は少貳氏の被官惟宗氏出身で、一貫して少貳氏と行動を共にした。大友氏の祖は中原親能で、筑後・豊後・肥後守護となった。島津氏は、島津庄の荘官である忠久が大隅・薩摩・日向守護となったものである。三人衆の中でも少貳氏は、尊氏西下の拠りどころであったので、九州最大の勢力となった。

菊池氏は大宰府有力府官藤原政則の子孫で、肥後に土着した豪族。元寇時に軍功があり、後醍醐天皇によって肥後守に任じられた。反尊氏側として各地で戦い、九州では一色氏や少貳氏と攻防戦をくりひろげた。

これ以外では肥後の阿蘇大官司氏と筑前の宗像氏がいた。前者は九州の動向に大きな影響を与える力があつたが、内部分裂により、その影は薄かった。後者は古代以来の筑前の名族で、海軍力を持ち、尊氏を江口に迎えた。

九州勢力ではないが、九州に大きな影響を与えたのが、大内氏である。その前身は周防の多々良氏であるが、平安末期に周防権守となって大内氏を称した。鎌倉時代には鎌倉御家人として六波羅評定衆に加わり、その地位を高めた。長弘が尊氏を九州に護送して肥後守となり、弘世が長門の厚東氏を追い払って周防・長門の守護となった。そして子の義弘と共に九州に出兵し、幕府方として大きく活躍した。

さて49年、九州に渡った足利直冬は肥後権守川尻幸俊に迎えられたが、その勢力が大きくなったのは、南朝方になった少貳頼尚と組んでからである。そして大友氏をも傘下にしたばかりか、尊氏と直義が一時的に講和した際、鎮西探題に補任され、九州の支配者となった。そして50年、直冬と頼尚は一色範氏を討って肥前に敗走させた。その結果、中国・九州の諸将が相次いで直冬の膝下に参集した。その結果、巨大な勢力に成長した直冬軍は肥後征西府軍と対決

するようになった。しかし52年に直義が死ぬと立場が微妙になり、余儀なく中国地方に移って勢力を張り、さらには京都を攻撃して尊氏・義詮父子を敗走させたりもしたが、最終的には義詮によって追われた。

一方、五条頼元に付き添われた征西宮懐良親王は、熊野・瀬戸内・村上の海賊の来援を得て42年に薩摩に到着したが、島津氏との合戦に6年を費やし、菊池城に入城したのは48年になってからである。

官方にとって大きな契機になったのは53年である。新たに九州探題に赴任してきた一色直氏が大友氏を味方に付け、南朝方となった大宰府の少貳頼尚を激しく攻めたが、菊池武光が救援に駆けつけてこれを救い、博多に入ってここを掌握したのである。55年には親王自ら菊池氏・少貳氏の5万余の軍勢を率い、肥前の一色氏を駆逐し、筑前・筑後を席卷した。兵力10万騎に達した親王軍は一気に豊後の大友氏泰を攻め、降伏させた。

その間、南九州では薩摩の島津貞久が、尊氏が日向守護に任じた畠山直顕と熾烈な戦いをくりひろげていたが、貞久は薩摩内の官方にも押され、56年に力尽きて官方に降伏した。官方になった貞久は、菊池武光とともに畠山勢に猛攻を加えたので、58年に直顕は日向山中に逃亡して姿をかくした。

しかしこれで終わったのではなかった。もともとは武家方であった大友氏と少貳氏は征西府の完全な九州支配を望まなかった。両者は連繫を保ちながら反旗を翻した。これに対し59年、菊池武光はまず大友氏を攻めて打撃を与え、ついで4万の軍勢を率いて、現久留米市付近で筑後川を間にして6万の少貳氏軍と対峙した。征西軍は夜陰に乗じて渡河し、大原野で壮絶な白兵戦を展開し、頼尚を敗走させた。武光軍はその後も少貳・大友軍と戦い、ついに61年、太宰府を占領した。以後12年間、征西府は不動の最

盛期を迎えた。

幕府は61年、新たに斯波氏経を鎮西管領に任命して九州に派遣した。氏経は豊後の大友氏・筑前の少貳氏、肥前の松浦党を率いて、太宰府の攻略を謀ったが、筑前長者ヶ原の合戦に破れ、大内弘世の来援をも求めたが、成功しないまま帰京した。65年には新探題に渋川義行が任命されたが、九州に踏み入ることさえ出来なかった。このように九州を完全に掌握した懐良親王は68年、7万余騎を率いて東上の途についた。しかし大友水軍が途中を遮り、さらに大内水軍500隻が出動して敵対したため、途中で断念せざるをえなかった。後醍醐天皇の戦略はここに挫折したのである。

新たに九州探題に補任された今川貞世が九州に足を踏み入れたのは71年暮のことであった。貞世は事前に弟の仲秋を肥前に送って松浦党を組み入れ、一子義範を豊後の大友氏を味方にして挙兵させた。自身は防長守護の大内弘世・義弘父子や安芸の毛利元春らを帯同して豊前に上陸した。こうして72年、三方から7万余騎の軍勢で大宰府を包囲し、陥落させた。敗れた菊地軍は高良山城、菊池隈府城へと移りながら、必死の抵抗を試みた。75年、今川軍が菊池に迫った時点で、貞世は島津氏久・大友親世・少貳冬資の来援を要請した。冬資が消極的だったので、みんなが参集した時、貞世は冬資を斬殺するという失敗をしでかした。この暴挙に怒った九州勢力は一斉に反今川となり、孤立した貞世は敗退した。局面を開くため、貞世は一時帰国していた大内義弘と大友親世の協力を得て、肥前蟬打で菊地軍を破ったが、肥後詫磨原で敗退してしまった。それでも貞世は徐々に巻き返し、81年、ついに菊池本城を陥落させた。その後は阿蘇を中心にしてゲリラ戦を展開した菊池武朝や島津氏と戦ったが、92年に南北合一が達成され、大勢は決した。

第2代將軍足利義詮を継いだ第3代將軍義満

は、この機会を利用して、敵対勢力となりうる有力な大名の排除を画策した（松岡久人『大内義弘』人物往来社、1966年）。89年、義満は一族の大名を従えて厳島神社に参詣した。この過程で中国・四国地方を固め、管領家の斯波氏と細川氏を和解させた。厳島で義満を接待した大内義弘は、その後上京し、そのまま在京することになった。

機とみた義満は90年、美濃・尾張・伊勢守護の土岐康行を一族の内部分裂を利用して討伐した。91年にはやはり内部分裂を煽って山名氏を没落させた。山名一族は、山陰・中国・近畿地方の11カ国の守護を占めて「六分の一衆」と呼ばれるほどの大大名であった。京都での合戦は熾烈なものであったが、この時義弘は獅子奮迅の働きで、幕府軍の勝利に大きく貢献し、その褒賞として、周防・長門・豊前・石見・和泉・紀伊六国守護に補任された。さらに義満は南朝勢力としきりに接触し、92年の南北合体に貢献した。

95年、今川貞世が突然解任された。貞世は九州に強大な軍事力をもって君臨し、高麗や明との外交をも独自に進めていた。貞世のこのような存在は、幕府にとって許せない時代になっていたのである。

堺にあった義弘は幕府に対して疑念を抱くようになった。そこで義満の再々の上洛命令に従わなかった。99年に起こった「応永の乱」は、堺に籠城した義弘軍を幕府軍が総力を挙げて攻撃した戦いであったが、義弘の討ち死にで終結した。それでも大内氏は周防・長門・豊前・筑前守護として、依然として大きな存在感を示した。

義満は1404年に「日本国王源道義」の名で朝鮮と国交を結び、明からも「日本国王」に冊封された。鎌倉時代には京都と鎌倉に王権が並立していた状態であったが、ここに初めて武家の足利氏が日本を代表する唯一の「日本国王」と

なったのであり、それは戦国時代、織豊時代を経て、徳川政権に受け継がれた。

ここで本筋の倭寇の問題について考えてみたい。

14世紀前半に日本人が高麗を侵したとある若干の記事は、「三島」や北九州の小規模な集団の海賊的行為を示すものであろう。少弐氏がそれを取り締まろうとしていることからしてもそう想定される。しかし後半になると局面は一変する。『高麗史』崔瑩伝には58年に「倭四百余艘」、『高麗史節要』恭愍王紀には74年に「倭船三百五十艘」、同書の辛禎伝には80年に「倭賊五百艘」とあるのが代表的である。これらの船数は報告者の誇張の可能性もあるが、とにかく倭寇は時には大船団を組んで侵入してきたことがあったのである。

50年は、足利直冬が少弐頼尚とともに九州探題の一色範氏を討った年である。

53年には頼尚は征西府と組んで筑前・筑後を掌握したが、59年の筑後川の戦いで、征西府軍が頼尚軍を破った。以後、今川貞世が91年に豊前に着任するまで、征西府が九州を支配下に置いたのである。そこでおおよその推定をすれば、50年代には少弐氏と宗氏が、70・80年代には征西府が、「三島」の勢力をも動かして倭寇を組織したと言えるであろう。

尊氏東上に際して少弐頼尚・大友氏泰・宗経茂らが尊氏に従ったが、その時の兵船は7千余艘であったという。少弐・大友・宗氏の水軍は無視できない規模であったのである。宗氏は以前から高麗に侵入していたこと、大友氏が九州北岸の糸島や香椎に拠点を持っていたことなどは、無視できない。少弐・大友・宗氏の連合も視野に入れる必要があろう。

征西府については、特に紀伊熊野と瀬戸内の海賊は一貫して南朝方で、懐良親王を九州に送ったのも、北畠親房父子らを東北に送ったのもかれらであった、ということが注意される。

特に九州では熊野水軍がそのまま留まって、征西府の水軍力となっていた可能性が十分であると思われるのである。1185年の壇ノ浦の戦いで、熊野水軍は源氏方の主力になったこと、元寇に際しては1292年に、熊野権現が鏡山を背後にした生の松原に勧請され、国家的規模で祈祷が行われたことなど（拙稿「八幡神の成立と展開」雄山閣、2001年）、熊野水軍は歴史的に九州と関係して、拠点を築いていたと思われるのである。懐良親王は71年以来、死後の86年まで、博多にあって5度にわたって明に入貢していることから、その海軍力の大きさが分かり、入貢も熊野水軍の意向を踏まえていた可能性が否定できない。90年代の倭寇の正体は、今川貞世に追われた南朝方諸勢力や「三島」の海賊が、必死の抵抗を試みて連合したものである可能性が大きい。

ここで看過できないのは大内氏である。64年に弘世は初めて上洛して將軍足利義詮に謁したが、その際に、数万貫の銭貨と新渡の唐物を持参して、たちまち幕府上下の人気を得たという。この献上物、特に唐物は倭寇との何らかの関係を推測させるが（松岡久人『大内義弘』1966年、人物往来社）、あるいは門司海峡を掌握していた弘世が直接、倭寇を組織して得たものとも考えられる。尊氏の西下に際して弘世は五百艘の兵船を動員し、義弘は懐良親王の東上の折にはやはり五百隻の船で遮っているのも、それは十分現実味があるのである。1429年に日本を訪れた朝鮮の朴瑞生が、瀬戸内海の港には必ず朝鮮人がいて、こき使われていたと書いている（『世宗実録』世宗11年12月乙亥条）が、この朝鮮人は瀬戸内の海賊よりも、大内氏と関係づけるほうが、可能性が高いであろう。

「南北朝の内乱」では九州で各勢力が自己の生存をかけて、複雑な関係を結びながら戦いあった。あまたの食料・人力や唐物などが必要とされ、それは最も近く、また防備の弱かった

高麗に向けられた。大内氏の例からみて、大きな勢力は兵船500艘を出動させることが出来たと言える。1338年の高麗の対馬遠征では300艘を破壊したという。豊臣秀吉が死去するや、島津軍は兵船500艘に乗って逃亡した。連合勢力なら、数百艘を組織することは決して不可能ではなかったのである。

倭寇の大発生は、九州や中国地方の特殊な事情と、当時の高麗の政治的状況にその原因があったのであるが、「南北合体」によって日本側の問題は解消したのである。

ここで李領『倭寇と日麗関係史』（東京大学出版会、1991年）について言及する必要がある。

李氏は、倭寇の主体を「国境なき海民」とか、＜高麗の賤民や済州島民＞とみる一部の見解を批判して、それは九州の政治勢力であったことを明確にした。

そして先行の研究を総合しながら、初めは少弐氏と対馬の宗氏、後には征西府であると結論付けた。李説は基本的に首肯され、拙稿でも参考にしたが、細部においてはもう少し考察の余地があるようである。例えば、庚寅年の倭寇は、足利直冬の攻勢に焦った少弐頼尚が宗経茂と協同して起こしたものという。確かに頼尚と直冬は最初敵対的關係にあって、直冬は2月に大宰府攻撃の軍を起こすが、倭寇船はおなじ2月にはすでに高麗に侵入している。そうすると対直冬戦と高麗侵入を同時に進めたという事であるが、それには軍事上の無理がある。それに直冬軍はまだ弱小であり、九州の他の幕府方守護をかたれば、頼尚が切羽詰った立場に落ちることもなかったはずである。頼尚は尊氏を迎えて共に戦い、その後も東上して尊氏軍として戦ったのであるから、戦費不足に悩まされ、それを倭寇行動で補おうとしたが、その直後に直冬の攻撃に直面したということであろう。9月に直冬と和解すると、もっと安心して高麗に向かったに違いない。

また倭寇の正体についても、もっと広く考える必要があるのではないだろうか。大友氏や島津氏・宗像氏、特に大内氏は無視できない。出雲や隠岐の勢力も無視出来ない。李氏が史料を挙げているように、『欄寝文書』によれば、1381年に大隅人が高麗で狼藉を働いたことが分かるが、これなどは、倭寇とは、当時の情勢の下で一攫千金をねらった、西日本のいろんな勢力であったという事を示唆している。もちろん、その基本的な勢力が少弐氏と征西府であったという事は、言を俟たない。

三、鏡神社所蔵の高麗楊柳観音像図

第一節では倭寇の正体について考察したが、明確な文献史料がない以上、それは単なる推測と言われるかも知れない。しかし九州に多く伝存する高麗後期の仏画・仏像・梵鐘などはその証拠になる可能性があり、特に鏡神社所蔵楊柳観音像図は倭寇略奪品であることが明白である。ゆえにそれは倭寇研究上のまたとない資料となるだけでなく、高麗史研究にも特別の意義をもっている。そこでこの節ではこの像図について多面的に検討することにする。

高麗絵画は焼失などの被害により、地上に残存するのは仏画だけである。高麗仏画は160点近くが確認されているが、その多くは日本に存し、1235年から1236年の紀年銘をもつ一連の「五百羅漢図」を別にすると、そのほとんどが高麗後期作で、楊柳観音像図は35点を数えとされる。

重要文化財指定の佐賀県唐津市鏡神社所蔵の「絹本着色楊柳観音像図」は、昭和年間に修復が行われたが、その際拡張され、現状では縦419・5、横254・2センチとなっている。実に高麗最大の美術的価値も高い仏画である。菊竹淳一・吉田宏志編『高麗仏画』（朝日新聞社、1981年）は、次のように解説している。

観音菩薩の肉親部は金泥で塗り、裳は朱地に

白色顔料で亀甲文を描き、透かして見えるように表現されたヴェールは白色顔料で輪郭と衣褶を描き、さらにその上に鳳凰・雲文を金泥で散らしている。そのヴェールの表現には質感が感じられる。鳳凰は洗練された筆致でまるで空中を翔けるかのように描かれている。それにくわえて、緑青と白色顔料を主調色とした裳をむすんだ腹帯の文様の生々しく自然な形状、風にそよぐような天衣、そして立体感のある岩の表現なども見事で実に究極の美に至ったともいえる程の画趣が感じられる。(中略) 高麗仏画における最大一枚絵絹による巨大な画幅、それにふさわしい各モチーフの描きくずれのない形状、そして文様の大きさと配置、彩色の調和がほぼ完璧といえるほど完成度が高い。

この見事な楊柳観音像図は、現在佐賀県立博物館に寄託されていて、簡単には見ることが出来ないが、平成2年、佐賀県鎮西町の名護屋城博物館が一千万円の費用をかけて精密な複製本を制作、展示しているので、それによってそのほぼ全貌を見ることが出来る。

さて、観音像図には寄進銘が記されているが、実は本来紀年銘があって、いつか切除されたことが、1812年に鏡神社を訪れた伊能忠敬の『測量日記』によって知ることが出来る。紀年銘と寄進銘を詳細に検討した平田寛「鏡神社所蔵楊柳観音画像再考」(『大和文華』72、1984年)と李泰勲「鏡神社所蔵高麗仏画(楊柳観音像)の発願者と日本将来について」(福岡大学人文論叢42巻4号、2011年)の二論文を参考にしながら、その内容について考えてみたい。

『測量日記』の「画成至大三年五月日」によれば、制作年月は1310年、高麗忠宣王3年である。願主は「王叔妃」とあるが、『高麗史』には忠宣王に「叔妃」は見えない。平田氏は一旦、「叔妃」は忠宣王の寵妃「淑妃」のこととした。李氏は銘文ではもともと「淑」であったが、長年の経過によって「ㇿ」が消失したとし、結果

的には平田説を支持する。一方、李氏は『測量日記』は紙面を節約するため追い込みで書かれ、そのため本来の字配りとは異なるようになったこと、「淑妃」という後宮の称号の上に「王」が付くということはある得ないことを挙げ、本来の銘文は「願主王」その「王」の左に並べて「淑妃」とあったか、あるいは「願主王 淑妃」とあったとし、願主は「忠宣王と淑妃」であるとした。李説は従うべき見解であろう。

「淑妃」については平田氏の説明があるが、李氏は当時の高麗王室の状況に関係付けながら、さらに詳述している。李論文を参考にすれば、次のようであった。

忠烈王は元の世祖フビライの娘斉国大長公主を正妃に迎えた。これより恭愍王まで、高麗は元の駙馬国となったのである。忠烈王の長子忠宣王も、忠烈王22年(1296年)に元の韓国公主(死後、蘇国大長公主)を正妃にしている。ただこれより先の忠烈王18年に忠宣王は趙仁規の娘の趙妃を納めていた。ところが忠宣王は韓国公主を嫌って趙妃だけを寵愛したので、怒った公主はこれを帝室に訴え、その結果、趙氏一族は元に連行されるという事件が起こっている。忠烈王24年に一旦忠宣王が即位したが、同年中に廃位され、忠烈王が復位した。34年(1308年)に忠烈王が逝去するが、元の武宗は自身の擁立の際の忠宣王の功を評価して、忠宣王を瀋陽王に封じ、続いて高麗王に復位させた。即位した忠宣王は、直ちに順妃許氏と淑妃金氏を後宮に迎え入れた。

順妃は平陽公眩に一度嫁いでおり、三男四女をもうけていたが、眩の死後、忠烈王に迎えられ、順妃に封じられたが、忠肅王3年(1316年)に死去した。

淑妃は彦陽君金文衍の妹で、姿色あったという。進士崔文に嫁したが、早く寡婦になった。忠烈王24年、忠烈後の斉国大長公主が逝去するに及び、世子(後の忠宣王)は忠烈王を慰めよ

うと金氏を王に納めた。おかげで金氏は淑昌院妃に封じられた。ところが忠烈王が逝去するに及び、忠宣王は金文衍家において妃と相対し、人の訝りをかうことがあったが、いくばくもなくして妃を納め、淑妃と称した。淑妃は日夜百態妖媚し、忠宣王はこれに惑って親しく政を聴かなかったという。忠宣王が元にあった時も遊宴多く、寺院を好み、車服衣杖の如きも公主をはばかりることがなかった。このように淑妃は忠烈・忠宣二代の王の寵愛を受けたが、忠宣王を惑わし、したい放題に振舞っていた。その権勢は似たような道をたどった順妃を、遥かに凌駕していたのであろう。1308年に即位した忠宣王は、同年の11月に元に行き、在位中は高麗に帰ることはなかった。淑妃を迎え入れて三か月後のことである。

紀年銘には制作者として8名の名が記されている。それはかれらが当代一流の絵師や技術者であったからであろう。淑妃は王不在の中、総力を挙げて制作したことが分かる。なぜこのような大作がこの時に必要とされたのかについては、諸説あって定説をみない。李氏は「元の圧政を受けていた高麗を守護するために忠宣王と淑妃金氏が発願し、制作されたものと考えられる」と言うが、制作年との関係が不明で、内容も抽象的で分かりにくい。井手誠之輔氏「高麗仏画の世界」(『別冊太陽 韓国・朝鮮の絵画』平凡社、2008年)は、この巨幅にふさわしいイベントは忠烈王の三回忌の仏事であったとして、当時の高麗の最大の権力者であり、熱心な仏教信者であった淑妃が、亡き忠烈王の心情をくみとり、国の安泰と衆生の救済を願って発願したとする。「国の安泰と衆生の救済を願って」の部分、そういう面があったとしても、それは建前上の事で、忠烈王三回忌にあたっての仏事であったとしてよいのではなかろうか。

忠烈王三回忌が特別に重要視されたのは、まず、王は忠宣王の父で淑妃の夫であり、淑妃は

また忠宣王の寵妃であるという、普通には考えられない濃密な相互の関係である。高麗の重臣たちは忠烈王父子を離間させようと画策したが、即位して元にあった忠宣王には、そのようなわだかまりはすでに消えていたに違いない。次に、忠烈王は太子の時代にフビライと会って長年の戦争を終結させた人物で、フビライは元を建国した世祖皇帝であるということである。そして忠烈王は世祖の娘と結婚して世祖の駙馬となったが、それが高麗駙馬国時代の幕を開けたことである。世祖・忠烈王こそ、高麗・元関係の出発点であり、高麗が忠烈王を尊崇することこそ、世祖尊崇につながり、対元関係を発展させる一つの鍵であったのである。そこで忠烈王三回忌を目指して興天寺が建設され、観音像図を本尊として、横に忠烈王の肖像画を並べて法事が挙行されたが、法事終了後、忠烈王の肖像画は撤去されたという事であろう。最終的に肖像画は忠烈王願利に奉安されたはずであるが、その願利は王が淑妃にみとられて他界した神孝寺ではなかろうか。

国家的に重要な意味を込めて制作されたこの観音像図が、贈与物や交易物になるはずはなく、それは倭寇の略奪品であったことに間違いない。

平田氏は、鏡神社が肥前松浦に所在すること、松浦地方に高麗時代の文物の伝存するものが少なくないことから、松浦党との関係を示唆する。これらの文物の中に略奪品が含まれていることは考えられるが、問題の観音像図の存在は、松浦党としては荷が重すぎる感が否めない。

李領「唐津鏡神社所在高麗水月観音図の由来」(「14世紀の東アジア国際情勢と倭寇」、『韓日関係史研究』26、2007年)は、楠井隆志「高麗朝鮮仏教美術伝来考」(山口県立美術館編『高麗・朝鮮の仏教美術展』1997年)を参考にして具体的な説を提示している。すなわち、恭愍王紀6年(1357)9月戊戌条に「倭入昇天府興天寺、取忠宣王及韓国公主真而去」とある記事は、寺

名や忠宣王夫婦の肖像画という略奪品の内容などを記している点で、他の記事とは区別されること、それが王室関係であることなどを理由に、観音像図はこの時興天寺にあって、忠宣王の肖像画とともに略奪されたというのである。この李領説については、李泰勲氏が次のような疑問を提起している。つまり、興天寺には忠宣王夫婦の肖像画が掲げられていたので、その寺は忠宣王の願刹であるかも知れないが、退位後に忠宣王は13年6月～14年正月の間、高麗に滞在して仏事を盛んに行ったが、一度も興天寺を訪れていないので、興天寺に自身と淑妃に関わった観音像図が安置されていた、とは考えられない、というのである。

ここで問題は忠宣王3年9月に、「元遣宦者院使李信来以護興天寺。晋王以是寺為願刹、故奏遣之」とある記事である。この年の5月に観音像図が完成し、忠烈王の死は3年前の7月である。忠宣王の舅の晋王甘麻剌は02年正月までには亡くなっているの、上記記事の「晋王」はその後継者ということになる。この「晋王」はなぜ、またどのような権限をもって興天寺を父王の願刹にしたかが問われるのである。

推測であるから、結論的に述べておこう。

10年5月に観音像図が完成し、7月に興天寺で忠烈王の肖像画と観音像図を掲げて忠烈王三回忌が盛大に挙行された。仏教篤信者であった忠宣王は元にいたので、元のある寺院で父王の三回忌を執り行った。忠烈王は世祖の婿で、元・高麗関係を樹立した人物であるから、元帝室でも無視できず、忠烈王と最も関係の深い晋王を法事に参加させた。ここで忠宣王と晋王との間で興天寺の将来について意見が交わされた結果、将来的には興天寺を忠宣王夫婦の願刹とすることにして、当面は興天寺を忠宣王の舅の願刹とした。そこで晋王はこの合意を元帝室に報告して了承され、9月に院使李信を派遣し、興天寺を護らせたのである。退位後に帰国した忠宣王

は、興天寺が晋王の願刹ということもあって、あえて興天寺を訪れなかったのであろう。やがて忠宣王夫妻が死去すると、興天寺は忠宣王夫妻の願刹となり、観音像図と共に夫妻の肖像画が安置されたのである。以上は李泰勲論文を参考にした憶測である。

観音像図は倭寇が略奪したことに違いないが、図が興天寺にあったのなら、やはり57年、恭愍王6年9月に倭寇が昇天府興天寺を襲って、忠宣王夫妻の肖像画を略奪したという事実がそれを指すことになる。倭寇は同時に観音像図や宝物をも奪ったに相違ないが、王の肖像画が最も重要な品であったから、それだけが記録されたのであろう。これについてはさらに後述する。

寄進銘には欠字があるが、『測量日記』によって補うことが出来る。それによると、良賢の先師良覚が随分と馳走して買い留め、坊中に安置し奉ったものであること、鏡神社二廟宮の成等正覚と先師の離苦得業、殊に良賢二世の成就円満の趣旨をもって、明德2年(1391年)12月12日に鏡神社の御燈坊に良賢が寄進したことが分かる。

この寄進銘で解明せねばならない点は、第一、なぜ僧良覚は必死になってこの図を探し求めたかということである。それは良覚がこの図の本来の所有者や、そのいわれと重要性を知っていたからに違いない。そして何か事あれば所有者の意図に従って鏡神社に寄進するよう、弟子の良賢に指示していたという事である。第二、「鏡神社二廟宮」とは神功皇后と藤原広嗣を祀った宮である事である。神功皇后は、「三韓征伐」に際して鏡山に登って戦勝を祈願したという伝説に基づいたもの、藤原広嗣は藤原宇合の子で、大宰府に左遷されたのを機に、740年に反乱を起こして失敗し、肥前で処刑された人物で、中央政界にも大きな影響を与えた。鎌倉時代の『縁起』によれば、745年に両宮が造立されたとあるが、それには信を置きたい。九州の武家

たちの間では、比較的早くから神功皇后崇拜熱が高まり、それらを石清水神宮の社僧が集大成し、元寇後の間もなく『八幡愚童訓』として完成させた（拙稿「八幡神の展開」『倭国王統譜の形成』雄山閣2001年）。鏡神社の創建も鎌倉時代以後、大宰府に勢力を張り、肥前守でもあった少弐氏の時と思われる。神功皇后は「三韓征伐」の英雄であり、広嗣は武家の先蹤で肥前で処刑されたので、両者は少弐氏らの尊崇を受けたのであろう。平田氏は、『測量日記』によって一宮の社僧は御室末宮師坊、二宮の社僧は御燈坊と呼ばれていたというので、良賢は二宮に像画を寄進したことになる。その年が1391年という事も視野に入れる必要がある。

おそらく観音像図は対馬の宗経茂と大宰府の少弐頼尚が興天寺から略奪したものであろう。宗氏は高麗王家の大寺院の所在に詳しく、少弐氏は仏画や仏像、法器などを求めていると思われる。当時、鎌倉時代以来の臨済禅が九州にも普及し、その他の宗派の動きも活発であった。それゆえ少弐氏などは、食料や人間などだけでなく、これらの仏教関係文物を高麗に求めたと考えられる。対馬・壱岐・松浦や博多湾内の志賀島などに、重要文化財を含めて小金銅仏・梵鐘・仏画など高麗文物が多く残存するのは、この傾向と無関係ではない。特に対馬豆酈多久頭魂神社蔵高麗金鼓、金字妙法蓮華教は観音像図と共に略奪されたものと推測される。ところが戦乱の時代にあつて、何らかの機会にそれらは市場に流失し、そこで少弐氏の頼みを受けた良賢が、最高の価値をもっていた観音像図を苦勞して探し求めたということではなかろうか。91年には今川貞世が九州一円をほぼ平定し、翌年には「南北合体」が実現した。このような中で、おそらくは大宰府にいた良賢は像画を持ちこたえられなくなり、先師の言いつけどおり、かつて少弐氏と因縁のあった鏡神社に像画を寄進したと推測されるのである。神社に仏教関係品を

寄進することは、対馬の例で分かるように、よくあったことで、鏡神社でも神社を運営していたのは、神社に併設された宮寺の社僧であったのである。また菊池に入った懷良親王は法華經普門品を書写して、筑後御井郡高良山玉垂宮に奉納したが、玉垂命は神功の「三韓征討」を助けた神とされていた。この事実も「武人」「神功」「神社」「仏教」の結びつきを示す好例であろう。

おわりに

高麗は長年に渡る蒙古との戦争と元の日本遠征で国力が疲弊したうえ、13世紀前半には元の駙馬国として、王の自立性が失われ、国内に複雑な問題を抱え込むようになった。時まさに日本では「南北朝の内乱」が勃発し、特に九州ではその余波が激しく押し寄せた。そこで九州最大の勢力であった少弐氏は、対馬の宗氏と組んで人間や食料、仏教的文化財を求めて高麗に押し寄せるようになった。長い海岸線のどこから侵入してくるか分からないこの倭寇を防ぐ事は至難の業であった。高麗では1310年に最初に元皇帝世祖の駙馬となった忠烈王の三回忌を記念して興天寺を建設し、そこに忠烈王の肖像画と大幅で芸術的価値の高い楊柳観音像図を掲げたが、元の位置に戻された忠烈王の肖像画以外は少弐氏と宗氏によって略奪された。この観音像図はその後の曲折を経て鏡神社に寄贈された。

1352年に即位した恭愍王は、元からの自立を計り、国内の元勢力と親元派を一掃し、さらに紅巾賊を撃退する一方、辛旽を登用して国内の政治改革に乗り出したが、正妃の魯国公主が死去した後は変身墮落し、国内を混乱に陥れた。その後を継いだ禰王も素行が悪く、権門世家の土地兼併と人民収奪は極限に達した。

九州では60年代から少弐氏を退けて南朝の征西府が支配者となり、熊野水軍に支えられて倭寇の主勢力になり、その侵入はますます激しくなった。50年代から本格的になった倭寇には、

九州のその他の勢力や現山口県の大内氏や出雲の勢力が絡んでいて、単純なものではなかった。拙稿が新しく強調した点である。

高麗で新火薬と火砲が生産され、海上で倭寇を討伐するようになると、倭寇は次第に動けなくなった。高麗に代わって朝鮮王朝が樹立され、日本で室町幕府が国内を統一すると、倭寇は消滅する運命をたどった。

拙稿は14世紀の高麗・日本の政治情勢を対比しながら、倭寇問題を深めようとしたものである。その多くは先行の研究業績を整理しながら、多少の新視点を導入したが、一般的な叙述が大部分であることも認めねばならない。またその問題提起も推測を重ねたに過ぎないと言えるであろう。諸賢の叱正を切望する次第である。